九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

道化師ツァラトゥストラ

細川, 亮一
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 倫理学・哲学

https://doi.org/10.15017/1156

出版情報：哲學年報. 60, pp.39-63, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

道化師ツァラトゥストラ

細川亮一

「綱渡り師は小さな扉から歩み出て、市場と民衆の上にかかるように二つの塔の間に張り渡された綱を渡っていた。彼がまさにその道の中央に来たとき、小さな扉がもう一度開いて、道化師(Possenreißer)のような多彩な服の男が飛び出し、速い足取りで綱渡り師の後を追った。『前に進め、足萎えよ』と彼の恐ろしい声が叫んだ。『前へ進め、怠け者、やみ商人、青ざめた者よ。私の踵でくすぐられないようにしろ。お前は塔の間で何をしているのだ。塔の中がお前に相応しい。お前を閉じ込めておけばよかったのだ。お前より優れた者の自由な道をお前は塞いでいる。』そして一言ごとに彼は綱渡り師にますます近づいて来た。しかし彼が綱渡り師にあと一歩のところに来たとき、あらゆる口を黙らせ、あらゆる目を凝視させる恐ろしいことが起こった。彼は悪魔のように叫び声をあげ、彼の道を塞いでいた者を飛び越えた(hinwegspringen)のである。しかし飛び越えられた者は、彼の競争相手がこのように勝利するのを見たとき、気が動転し綱を踏み外した。……」(「序説」6)

道化師が綱渡り師を飛び越えるというこの出来事は『ツァラトゥストラ』の序説の中で最も印象深い場面であり、序説の核心をなすだろう。序説は『ツァラトゥストラ』全体に対する序説であるから、この出来事の意味を捉えないかぎり、『ツァラトゥストラ』という物語全体は理解できないだろう。この出来事は、序説での中心テーゼに関わっている。「人間とは、動物と超人との間にかけられた一本の綱、深淵の上にかかる一本の綱である。」(「序説」4)この出来事の意味を正確に捉えることはこのテーゼを解明することになるだろう。それは『ツァラトゥストラ』という物語全体を新たに読み直すことへと導くだろう。

一　ツァラトゥストラの敵対者としての道化師？

道化師が綱渡り師を飛び越え、それによって綱渡り師が綱から落ちて死ぬという出来事は、一体何を意味しているのか。それは『ツァラトゥストラ』全体の展開といかなる関係にあるのか。そもそも飛び越えるという道化師の行為は否定されているのか、肯定されているのか。この問いに対する答えは明らかなように見える。綱渡り師を飛び越え死に至らしめる行為など肯定されるはずがない。しかも道化師は「悪魔のように叫び声をあげ、彼の道を塞いでいた者を飛び越えた」のである。真剣に綱を渡ろうとしていた綱渡り師を綱から落とすという行為は悪魔の仕業であり、否定されるべき行為である。ツァラトゥストラがこんなひどいことをするはずがないから、道化師はツァラトゥストラの対照者・敵対者である。私の知るかぎり、従来のすべての解釈は道化師の行為を否定されるべきものと理解している。ニーチェ哲学に関してその解釈が一致することは例外的なことである。たいていは各人が好き勝手な解釈をしているのが通例だからである。

ヤスパース『ニーチェ』は次のように理解している。「道化師はツァラトゥストラと極めて近い関係にある彼の不気味な分身のように登場する。しかし彼との対照によって道化師は、まさに真正な真理を捉え損なう者として現れる。ツァラトゥストラが人間を本来的に『克服する』(überwinden)ことを欲する場合、道化師はあつかましく気楽に考える、人間は『飛び越え』(übersprungen)られうると。[1]」「人間は飛び越えられうる」と道化師が考えるとされるのは、『ツァラトゥストラ』第三部「新旧の板」4においてである。「克服の多種多様な道と方法がある。それに心がけよ。しかし道化師(Possenreißer)だけが考える、人間はまた飛び越えられうると。」(第三部「新旧の板」4)序説における道化師の飛び越える(hinwegspringen)という行為は、必ず第三部「新旧の板」のこの個所と結びつけて、しかも否定的に解釈される。ヤスパースはこうした理解から、ニーチェを仮面の哲学と見なすのである。

ドゥルーズ『ニーチェと哲学』も道化師について同じ解釈をしている。「ツァラトゥストラの物語全体はニヒリズム、つまり悪魔との関係のうちにある。悪魔は否定の精神、否定の力である。……あるときは、悪魔は人間を飛び越え、人間から全ての力と意欲を奪う。[2]」「悪魔が人間を飛び越える」ことは、『ツァラトゥストラ』序説の道化師、そして第三部「新旧の板」から理解されている。その註に次のようにあるからである。「道化師が綱渡り師に追いつき飛び越えるという、序説の有名な場面を参照。この場面は第三部「新旧の板」において解明されている。……[3]」ドゥルーズもまた序説と「新旧の板」を結びつけ、悪魔＝道化師をツァラトゥストラの敵対者としている。道化師＝悪魔は否定の精神であるのに対して、ツァラトゥストラは「肯定の精神[4]」なのである。

ヤスパースもドゥルーズも道化師の解釈において一致している。もし道化師のこうした解釈が完全に誤っているとすれば、ヤスパースの仮面の哲学といった理解、ドゥルーズのニヒリズムの理解は、ともに的外れとなるだろう。しかしここでの狙いはヤスパースやドゥルーズのニーチェ解釈を批判することでない。道化師についての二人の理解は独自なものでなく、単に通説を踏襲しているだけなのだから。

日本において『ツァラトゥストラ』の翻訳は数多く出版されているが、序説での道化師と「新旧の板」の道化師を重ねて、しかも否定的に理解していることにおいて、一致している。一例を挙げれば、『ツァラトゥストラ』（白水社）の訳註において、道化師は「超人に至る過程を一歩一歩忠実に歩もうとはせず、何らかの超越的理念や非合理的な手段で現実を『飛び越そう』とする、ユートピア的革命論者の象徴」である。そして綱渡り師は「身を賭して超人への道を歩む人間の姿を象徴している」とされる。[5]

ニーチェ解釈としては珍しく、道化師がツァラトゥストラの敵対者であるという理解において、従来の解釈は一致している。道化師はツァラトゥストラの対照者、超人の敵対者である。しかしこの場合、解釈が一致していることはその正しさを証明するのでなく、むしろ先行する解釈を無批判に踏襲していることを示しているにすぎない。こうし

た解釈が由来する一つの源泉として、ナウマン『ツァラトゥストラ・コメンタール』（一八九九年）がある。

ナウマンは『ツァラトゥストラ』の序説における綱渡り師を「自らを危険にさらす現在の人間、自由精神」と肯定的に解釈する。それに対して道化師はその敵対者である。「道化師は綱渡り師の意識的な敵対者である。萎えた、怠惰な、静かな、生彩がないと彼によってののしられる者に対して、素早く、跳びはね、騒々しく、多彩である。彼はともかく、現在の状態を無造作に飛び越えよう(überspringen)とする……ユートピア的な哲学者である。」[6] 道化師のこの解釈は「新旧の板」4に基づいている。つまりナウマンは序説での道化師と「新旧の板」における道化師を結びつけ、道化師をユートピア的な哲学者として否定的に解釈している。

しかしここでナウマンの解釈を取り上げたのは、それが現在の解釈の源泉となっているという理由からだけでなく、矛盾を認める解釈者としての誠実さのためである。ナウマンはニーチェにおける道化師の意味のうちに二つの矛盾を認めている。第一に「新旧の板」における道化師の言葉と、遺稿の次の言葉との矛盾である。「ツァラトゥストラ自身が、哀れな綱渡り師を飛び越える(hinwegspringen)道化師である。自己に対する嘲り。」[7] この遺稿断章はツァラトゥストラ自身が序説における道化師であると明言している。「新旧の板」の道化師を否定されるべき者と理解すれば、遺稿の「ツァラトゥストラ＝道化師」と一致しないことは明らかである。

もう一つの矛盾は、『ツァラトゥストラ』の序説そのもののうちにある。ナウマンは序説9におけるツァラトゥストラの言葉を引用する。「私の目標に私は向かおう。私は私の道を行く。ためらう怠惰な者たちを私は飛び越える(hinwegspringen)だろう。このように私の歩みが彼らの没落であって欲しい。」（「序説」9）このツァラトゥストラの決意は明らかに道化師の「飛び越える」(hinwegspringen)という行為を目指している。つまりツァラトゥストラは道化師になろうと決意しているのである。ツァラトゥストラが否定されるべき道化師となろうとすることは、明かな矛盾であろう。

ナウマンが気づいていた二つの矛盾は、道化師を否定的に理解するすべての解釈に当てはまる。ナウマンはこうした矛盾、道化師についての「分裂した見解」をニーチェ自身のうちに見た。しかしそもそも序説の内部で誰にでも分かる矛盾を犯すこと、しかも『ツァラトゥストラ』全体に対する序説という重要な箇所で不整合な記述をなすこと、このようなことは考えられない。ニーチェがそれほど愚かな哲学者（？）であるとすれば、読む価値などないだろう。しかしよくあることだが、解釈者の側での理解の混乱、無理解をニーチェの所為にしているだけである。つまり「道化師＝ユートピア主義者」と否定的に解釈したからこそ、こうした矛盾が生まれたにすぎない。この矛盾を非難するにしろ、仮面（逆説、両義性）の哲学として持ち上げるにしろ、ニーチェの道化師のうちに見られるとされる矛盾は、解釈者の混乱の単なる反映に過ぎない。こうしたことは至る所で見られる解釈の常套手段（？）である。

『ツァラトゥストラ』序説からツァラトゥストラが「ためらう怠惰な者たちを飛び越える(hinwegspringen)」道化師となろうと決意することは否定できないし、遺稿はツァラトゥストラが「哀れな綱渡り師を飛び越える(hinwegspringen)道化師」であることを明らかに語っている。とすれば「新旧の板」の道化師を否定的に解釈することが誤っていることになる。そうすれば矛盾など生じないだろう。道化師をツァラトゥストラの敵対者とするこうした理解は、従来の解釈がこの点で一致しているという理由以外に、何の根拠も持っていないのである。

二　道化師＝超人としてのツァラトゥストラ

序説での道化師を否定的に解釈し、ツァラトゥストラの敵対者とすることには、二つの理由があるだろう。まず第三部「新旧の板」4における道化師を否定的に解釈し、そこから序説の道化師を理解すること、そして序説の道化師が悪魔とされていることである。まず最初の理由を検討しよう。

「克服の多種多様な道と方法がある。それに心がけよ。しかし道化師(Possenreißer)だけが考える、人間はまた飛び

越えられうると。」（「新旧の板」4）「人間を克服する」とは人間の自己克服を意味する。しかし「人間を飛び越える」とは他の人間を飛び越えることである。この違いをまず確認しなければならない。人間を飛び越える（überspringen）ことは、序説での道化師が綱渡り師を飛び越えること（hinwegspringen）と同じ行為である。それ故重ねて理解することに問題はない。しかし問うべきなのは「人間を飛び越える」ことが否定されているのかどうかである。同じ「新旧の板」でツァラトゥストラははっきり語っている。

「おお、私の兄弟たちよ、私はそもそも残酷なのか。しかし私は言う、落ちるものは、またさらにそれを突き落とすべきである、と。」（「新旧の板」20）突き落とすというツァラトゥストラの残酷な行為は、「人間を飛び越えること」「綱渡り師を飛び越え、綱から落とし死に至らしめること」と同じ行為である。この行為をツァラトゥストラは自分自身の行為として語っている。道化師だけが考えるとされている思想はツァラトゥストラ自身の思想である。ツァラトゥストラは道化師なのである。

人間を飛び越えるという道化師の思想はツァラトゥストラ自身の思想である。第四部「挨拶」において、自らを「老いた道化（Narr）」[8]と呼ぶツァラトゥストラは語る。「お前たちは橋にすぎない。一層高い者たちがお前たちを越えて歩む（hinübertreten）ように。お前たちは階段である。それ故お前たちを越えて（über euch hinweg）高みへ登る者に対して怒るな。」（「挨拶」）ここでツァラトゥストラが語っているのは、「人間を飛び越える」という道化師の思想である。しかし人間を飛び越え、人間を突き落とす者は残酷な者であり、悪魔であろう。しかしツァラトゥストラは悪魔なのであろうか。

序説の道化師は悪魔として現れる。彼は「悪魔のように叫び声をあげて」綱渡り師を飛び越える。そして綱渡り師にとって、道化師は悪魔である。死につつある綱渡り師は言う。「私はずっと前から、悪魔が私の前に足を突き出してつまづかせるだろうことを知っていた。今や悪魔は私を地獄へ引っぱっていく。」（「序説」6）悪魔＝道化師は否

定されるべき者であり、ツァラトゥストラが悪魔であることなど考えられないだろう。やはり道化師はツァラトゥストラの敵対者とすべきだろう。「道化師＝悪魔」ということのうちに、道化師を否定的に解釈することの理由がある。

確かに人間を飛び越える道化師は、人間にとって悪魔として現れる。しかしそれは否定されるべき者でなく、超人なのである。第二部「処世術」においてツァラトゥストラは語る。「お前たちが私の超人を悪魔と呼ぶだろうと推測する。」（「処世術」）これはたまたま言われたことでなく、超人の核心をなしている。『この人を見よ』においても、「善にして義なる者たちはツァラトゥストラの超人を悪魔と呼ぶだろう」（『この人を見よ』「なぜ私は運命なのか」5）と言われている。

とすれば序文での道化師は悪魔であり、超人であることになる。道化師が超人であるとすれば、道化師はツァラトゥストラの敵対者でなく、まさにその正反対の者、ツァラトゥストラがなるべき超人でなければならない。だからこそツァラトゥストラは「ためらう怠惰な者たちを飛び越える」道化師となろうと決意するのである。「私の目標に私は向かおう。私は私の道を行く。ためらう怠惰な者たちを私は飛び越えるだろう。このように私の歩みが彼らの没落であって欲しい。」（「序説」9）道化師＝超人になることによって初めて、永遠回帰の教師となること、永遠回帰の教えを教えることが可能となる。「ツァラトゥストラは超人の幸福から、すべてのものが回帰するという秘密を語る。」[9]『ツァラトゥストラ』はツァラトゥストラが道化師＝超人となる物語である。確かにツァラトゥストラは「超人の告知者」として登場する。しかし『ツァラトゥストラ』においてツァラトゥストラは予言者であると同時に、その予言の成就者なのである。

ツァラトゥストラが道化師となることは遺稿から明らかであった。「ツァラトゥストラ自身が、哀れな綱渡り師を飛び越える(hinwegspringen)道化師である。第三部のために、自己への嘲り。」[10]この断章と同じノートに属する断章に次のものがある。「第三部はツァラトゥストラの自己克服である。それは超人のための、人類の自己克服の模範であ

る。／そのために道徳の克服が必要である。／お前はお前の友たちを犠牲にする。彼らはそれによって没落するほど十分深い。そして彼らはこの思想を創造したのではない（このことがなお私を支えている）。／これは、ツァラトゥストラの前に立ちはだかる最後の反論、最強の敵である。今やツァラトゥストラは熟した。[11]」ツァラトゥストラは道化師であるとともに、「超人実現のための規範」として構想されている。つまり道化師であることは超人であることを意味する。この構想は第三部においてツァラトゥストラが「あわれな綱渡り師を飛び越す道化師」となることを考えている。道化師は超人である。綱渡り師を飛び越すとは、道徳の克服、つまり同情の克服を意味する。ツァラトゥストラのこの歩みは「ためらう怠惰な者たちの没落」となる。つまり永遠回帰という最大の重しに耐えられない者は没落するのであり、そうした没落を惹き起こす教えを説く者は彼らにとって悪魔として現れる。飛び越えられ綱から落とされる綱渡り師にとって道化師は悪魔である。そして綱渡り師は超人への道を歩む者でなく、道化師によって飛び越えられ没落する者にすぎない。

序説での道化師をツァラトゥストラの敵対者とする解釈を支持するように見える根拠を検討した。道化師はツァラトゥストラの敵対者でなく、ツァラトゥストラがなるべき姿を予め示しているのである。それは道化師＝超人である。このように理解できるとすれば、つまりツァラトゥストラの敵対者としての道化師という解釈を放棄しさえすれば、道化師の意味に矛盾や逆説（？）は無くなり、ナウマンが指摘した二つの矛盾は解消する。[12]

しかしさらに以上の解釈は序文での有名なテーゼ「人間とは、動物と超人との間にかけられた一本の綱、深淵の上にかかる一本の綱である。」（「序説」4）を理解することへと導くだろう。道化師が綱渡り師を飛び越える事件が起こる前に、ツァラトゥストラは綱渡り師がこれから綱を渡ることを機縁にしてこのテーゼを語っている。綱渡り師との関係でこのテーゼが提示されているのだから、このテーゼは道化師が綱渡り師を飛び越える出来事と関係しているはずである。道化師が綱渡り師を飛び越えるのは、塔の間にかけられた一本の綱での出来事である。この出来事は

「人間＝一本の綱」テーゼの意味を解明する光を与えるだろう。

三　人間は深淵にかけられた一本の綱である

「人間とは、動物と超人との間にかけられた一本の綱、深淵の上にかかる一本の綱である。」（「序説」4）このテーゼを理解するために、先ず『ツァラトゥストラ』の根本思想が永遠回帰の思想であることを想起しよう。序説が『ツァラトゥストラ』全体に対する序説であるとすれば、この序説のうちに永遠回帰の思想が語られていなければならないだろう。

序説においてツァラトゥストラが新しい真理を獲得し、綱渡り師を飛び越える道化師となる決意をしたのは太陽が正午に位置する時であり、その時ツァラトゥストラの動物たちが現れる。「一羽の鷲が空に大きな円（Kreis）を描き、その鷲に一匹の蛇がぶら下がっていた。それは獲物のようにでなく、友のようにであった。というのも蛇は鷲の首に輪を描いて（geringelt）巻き付いていたからである。」（「序説」10）蛇が「輪を描く（geringelt）」という表現は永遠回帰の永遠性を意味するし、鷲の描く円も永遠回帰の思想との関係を示唆しているだろう。ツァラトゥストラの動物である蛇と鷲は永遠回帰の思想を暗示しているのである。そしてこの動物たちは序説1でも言及されるが、そこで語られる太陽は「溢れるほど豊かな天体」（「序説」1）として贈る徳（＝力）であり、その光、つまり永遠回帰の教えという光を贈る。永遠回帰の思想は序説の最初と最後において読み取ることができる。そして道化師となることは永遠回帰の教えを教えることを意味する。永遠回帰の思想は序説全体を導き支配している。とすれば永遠回帰の思想は「人間＝一本の綱」テーゼのうちにも読み取ることができるだろう。

「人間とは、動物と超人との間にかけられた一本の綱、深淵の上にかかる一本の綱である。」（「序説」4）このテーゼのどこに永遠回帰の思想を見出せるのか。それは「深淵」という言葉のうちにである。第三部「幻影と謎」で「黒

い重い蛇が牧人の喉をかむ」という幻影が語られる。黒い重い蛇は最も重い思想としての永遠回帰の否定面（最も黒いもの）を意味する。その次の章「意に反する至福」において次のように語られる。「ついに私の深淵が動き出し、私の思想が私をかんだ。／ああ、お前私の思想である深淵的な思想よ。……」（「意に反する至福」）ここでの記述は前章「幻影と謎」における「蛇が牧人の喉をかむ」ことに対応している。「私の深淵＝私の思想」は「深淵的な思想」であり、永遠回帰の思想を意味する。しかも牧人の喉をかむ黒い重い思想として、永遠回帰の否定面を意味している。私をかむ永遠回帰の思想の否定面が「深淵」と表現されている。とすれば「人間＝一本の綱」テーゼにおける深淵は永遠回帰の否定面を意味するだろう。人間は永遠回帰の思想という深淵にかけられた一本の綱である。このことは道化師が綱渡り師を飛び越えることといかに関係するのか。

ツァラトゥストラは綱渡り師を飛び越える道化師となる決意をする。彼は「私の歩みがためらう怠惰な者たちの没落である」ことを意志する。永遠回帰という最大の重し（永遠回帰の否定面）に耐えられない者が没落することを意志するのである。それは道化師が綱渡り師（＝ためらう怠惰な者）を飛び越えることなのである。それによって綱渡り師が綱から落ちることは、深淵へと落ちることであるが、それは永遠回帰の思想の重さ（黒い重い蛇としての永遠回帰の否定面）によって没落することである。深淵は永遠回帰の否定面として極限のニヒリズムを意味する。「私はお前たちに最も重い思想を与えた。恐らく人間はそれによって没落するだろう。」[13]

道化師が綱渡り師を飛び越える出来事が起きたのは、「綱渡り師がまさにその道の中央(Mitte)に来たとき」であった。つまり「動物と超人との間にかけられた一本の綱」の中央での出来事である。このことはツァラトゥストラが永遠回帰の教えを教える大いなる正午へと導く。第一部最終章「贈る徳」3においてツァラトゥストラは語る。「大いなる正午とは、人間が動物と超人との間の彼の軌道の中央に立ち、夕方への彼の道を最高の希望として祝う時である。何故ならそれは新しい朝への道だからである。」（「贈る徳」3）永遠回帰の思想が告知される大いなる正午において、

軌道の中央で祝いうる者は、「一つの希望の子供たち」（「贈る徳」3）である。しかし「ためらう怠惰な者たち」は大いなる正午という軌道の中央において、つまり動物と超人との間にかけられた一本の綱の中央において、綱から深淵へと落ちるのである。道の中央は大いなる正午として、古き世の没落と新しき世の誕生を意味している。道の中央とは歴史の分水嶺である。永遠回帰の思想はそれに耐えられない者にとっては、それへと落下せざるをえない深淵（極限のニヒリズム）であるが、それを耐え肯定しうる者にとっては、光の深淵となるだろう。

道化師は道の中央において綱渡り師を飛び越える。ツァラトゥストラは大いなる正午において道化師として「ためらう怠惰な者たち」を飛び越える。このように悪魔として飛び越えうる者は超人である。「軌道の中央で超人が生まれる」[14]とはこのことを意味する。つまり道化師＝超人である。

序説においてツァラトゥストラは超人を教えるが、その超人は道化師として形象化されているのである。しかしツァラトゥストラが道化師＝超人となる決意をするのは、序説の最後においてである。ではその前のツァラトゥストラはいかなる状態にあったのか。

四　道化と死体の中間

「人間の生存は不気味であり、依然として意味が欠けている。つまり道化師が人間の生存にとって破滅のもとになりうる。／私は人間たちに彼らの存在の意味を教えよう。つまりその意味とは、超人であり、人間という暗い雲からの電光である。／しかし私はなお人間たちから遠く離れており、私の思いは彼らの思いに伝わらない。私はなお人間にとって道化と死体の中間である。」（「序説」7）

道化師によって飛び越えられ綱から落ち死んだ綱渡り師のそばで、ツァラトゥストラはこのように彼の心に向かって言う。ツァラトゥストラのこの言葉は何を意味するのか。「人間の生存が不気味であり、依然として意味が欠けて

いる」とはニヒリズムを意味する。「不気味」という言葉は遺稿へと導く。「ニヒリズムが戸口に立っている。すべての客のなかで最も不気味なこの客はどこから我々のもとに来たのか。[15]」「意味が欠けている」とは神の死による意味（神＝最高価値）の喪失であり、生存の「何のために」を欠いたニヒリズムである。[16]

このニヒリズムという事態の言い換えとして道化師が語られる。「道化師が人間の生存にとって破滅のもとになりうる」とはいかなることか。この道化師（Possenreißer）は、綱渡り師を飛び越えた道化師を背景としている。すぐ前で語られた出来事、道化師が綱渡り師を綱から落とし破滅のもととなったことを想定しているのである。綱渡り師にとって道化師は破滅のもととなった。道化師が綱渡り師を飛び越えるとは、彼が告知する永遠回帰の思想という最大の重し（極限のニヒリズム）に耐ええない者が没落し破滅することである。同じものの永遠回帰の否定面は、目標のなさ、全てが空しいことを意味する。それは極限のニヒリズムである。

このニヒリズムに耐え、永遠回帰の否定面を肯定へと転化する者として超人が提示される。ニヒリズムをもたらす道化師と対立した形で、人間の存在の意味として超人が導入されているように見える。しかし「道化師が人間の生存にとって破滅のもとになりうる（kann）」と書かれていることに注意しよう。「なりうる」とは別の可能性を示している。つまり永遠回帰の思想は「黒い重い蛇」として極限のニヒリズムとして、「ためらう怠惰な者たち」にとって破滅のもとになりうるが、しかしこの深淵は「光の深淵」ともなりうるのである。永遠回帰がそれにとって「光の深淵」となるうる者こそが超人である。超人は永遠回帰という「最も重い思想がそれにとって軽く至福である存在者」[17]である。そして超人は「超人の幸福から、すべてのものが回帰するという秘密を語る」[18]。永遠回帰のこの告知によってそれに耐ええない者が破滅するだろう。この超人の行為は、綱渡り師を飛び越える道化師の行為である。「超人となれ」という教えは、「道化師となれ」という教えなのである。超人＝道化師こそが人間の存在の意味である。

しかしツァラトゥストラは彼の教えが人々に伝わらないことを嘆き、そして言う。「私はなお人間にとって道化と

死体の中間である。」「道化と死体の中間」とはいかなることなのか。それは「私はなお人間たちから遠く離れており、私の思いは彼らの思いに伝わらない」ことの言い換えと一応理解できる。このことは序説8での道化師の言葉から明らかなように見える。「人がお前を笑ったことはお前の幸福であった。つまりまことにお前は道化師(Possenreißer)のように話したのだ。お前が死んだ犬と仲間になったことはお前の幸福であった。お前がそのようにへりくだるとき、お前はお前自身を今日救ったのだ。」(「序説」8)ツァラトゥストラは人々から笑われ、綱渡り師の前座として扱われている。ツァラトゥストラの教えは人々に通じていない。笑われる道化師として、へりくだった死んだ犬として、つまり「道化と死体」としてツァラトゥストラは扱われた。確かに一応このように理解できる。しかし単にそうした意味にすぎないのであれば、「私はなお人間にとって道化であり死体である」(Noch bin ich ein Narr und ein Leichnam)と言えば十分であろう。何故「道化と死体の中間」(eine Mitte zwischen einem Narren und einem Leichnam)と表現されたのだろうか。

die Mitte zwischen A und Bという表現は、「AとBとの中間」、AであるのでもBであるのでもなくその中間点にいること、どちらにも偏らない位置にあることを言い表している。つまり「道化と死体の中間」は、「道化であり死体である」を意味していない。では序説においていかなる意味で使われているのか。die Mitte zwischen A und Bという表現は、『ツァラトゥストラ』序説の草稿に使われている。「人間は植物と幽霊の中間(die Mitte zwischen der Pflanze und dem Gespenst)であるだろう。」[19] この表現は、『ツァラトゥストラ』では次のように言い換えられている。「お前たちのなかで最も賢い者もまた、植物と幽霊との分裂、中間的存在(ein Zwiespalt und Zwitter von Pflanze und von Gespenst)にすぎない。」(「序説」3)「植物と幽霊の間の中間」は「植物と幽霊との分裂、中間的存在」と言い換えられている。とすれば「道化と死体の中間」とは「道化と死体との分裂、中間的存在」を意味するだろう。しかしツァラトゥストラが「道化と死体の中間」、道化でも死体でもないどっちつかずの中間的存在であるとはいかなることなのか。

死体は無論、道化師によって飛び越えられた綱渡り師の死体である。死につつある綱渡り師はツァラトゥストラに最後に言う。「私は鞭とわずかな餌によって踊ることを教えられた一匹の動物以上のものではない。」（「序説」6）綱渡り師のこの最後の言葉は彼の本質を言い表している。この言葉は「人間とは、動物と超人との間にかけられた一本の綱、深淵の上にかかる一本の綱である」というテーゼから理解されねばならない。綱渡り師は綱を渡り超人となる者ではない。逆に彼は動物にとどまっている。彼は「人間を克服するよりむしろ動物に戻ろうとする」（「序説」3）人間に属する。[20] だから道化師は言うのである。「お前は塔の間で何をしているのだ。塔の中がお前に相応しい。お前を閉じ込めておけばよかったのだ。お前より優れた者の自由な道をお前は塞いでいる。」（「序説」6）綱渡り師は「塔の中が相応しい」者、つまり動物にとどまる者にすぎない。だからこそ綱渡り師は道化師に飛び越され、深淵へと落ちるのである。綱渡り師は「死んだ犬」と呼ばれる。つまり「死んだ」（死体）であり、「犬」（動物）である。確かに綱渡り師は綱を渡ろうとする。しかし彼がそうするのは、「鞭とわずかな餌によって踊ることを教えられた一匹の動物」としてであり、彼の意志によってではない。綱渡り師は他の人の指示どおりに動く者、「他の者によって運ばれる死体」である。綱渡り師は綱から墜落したから死体となったのではない。彼は最初から「死んだ同伴者」なのである。

死体が綱渡り師を意味しているように、道化は綱渡り師を飛び越えた道化師を意味している。「道化と死体の中間」とは「道化師と綱渡り師の中間」である。ツァラトゥストラは道化師でも綱渡り師でもない中間的存在にすぎない。しかしそれは何を意味するのか。道化師が綱渡り師を飛び越えることは残酷な行為であり、綱渡り師への同情があればなしえない行為である。しかしツァラトゥストラは死にゆく綱渡り師を慰め、看取り、その死体を埋葬する。ツァラトゥストラは明らかに綱渡り師に同情している。[21] ツァラトゥストラは超人を教えながら、超人（＝道化師）によって飛び越えられる綱渡り師（永遠回帰の思想によって押しつぶされる人）に対する同情から自由ではない。後になっ

てツァラトゥストラは語ることになる。「おお、私の兄弟たちよ、私はそもそも残酷なのか。しかし私は言う、落ちるものは、またさらにそれを突き落とすべきである、と。」（「新旧の板」20）これは道化師の思想である。しかし序説のここでのツァラトゥストラは、超人（道化師）を教えながら、綱渡り師（死体）への同情に捕われている。ツァラトゥストラは「道化と死体の中間」にすぎない。

ツァラトゥストラが「道化と死体の中間」にすぎないこと、あるいはむしろ死体の側にいることを知らしめるのは、ツァラトゥストラがその後に出会う人々、つまり道化師、墓堀人、隠者である。

五　道化師ー墓堀り人ー隠者

綱渡り師の死体を埋葬しようとして町を出るツァラトゥストラは、道化師、墓堀人、隠者に出会うことになる。それは奇妙な出来事である。そうした人々の登場の意味を読み取らねばならない。それこそが解釈、解読、テクストを読むことである。何故こうした人々がツァラトゥストラに出会うのか。

最初に出会うのは、綱渡り師を飛び越えた道化師である。彼がツァラトゥストラに語った最後の言葉は次のものである。「この町から立ち去れ。さもないと明日私がお前を飛び越えるだろう、生きている者が死んだ者を飛び越える(hinwegspringen)だろう。」（「序説」8）道化師がツァラトゥストラを飛び越える(hinwegspringen)とは、道化師が綱渡り師を飛び越える(hinwegspringen)ことと同じ行為である。しかもそれは生きている者が死んだ者を飛び越えることとされている。ツァラトゥストラは綱渡り師と同じく、飛び越えられる者であり、死んだ者として扱われている。道化師はツァラトゥストラを死んだ者＝綱渡り師と同じ者として、死んだ者の側にいる者として扱っている。ツァラトゥストラは自分を「道化と死体の中間」と感じていた。しかし道化師はこの曖昧さを打ち砕く。道化師はツァラトゥストラが綱渡り師（死体、死んだ者）の側に立っていることを露にするのである。ツァラトゥストラは綱渡り師に

同情している。それは飛び越される者（綱渡り師＝死体＝死んだ者）の側に立っていることである。

ツァラトゥストラが次に出会うのは墓掘人たちである。彼らはツァラトゥストラをあざ笑い言う。「ツァラトゥストラは死んだ犬を運び去る。いいことだ、ツァラトゥストラが墓掘人になったとは。……悪魔はツァラトゥストラと死んだ犬の両者を盗む、悪魔は両者をむさぼり食うだろう。」（「序説」8）ツァラトゥストラが墓掘人となるとは、死体にのみ関わる人間、死体の側にいる人間となることである。そしてここで悪魔が語られるが、この言葉は悪魔としての道化師を想起させる。悪魔がツァラトゥストラと死んだ犬を盗み、むさぼり食うとは、道化師が綱渡り師を飛び越えることと同じである。ツァラトゥストラは死んだ犬である綱渡り師と同じく、飛び越えられる者に属している。墓掘人たちの言葉は道化師の言葉と同じこと、つまりツァラトゥストラが死体と同じであることを語っている。

最後にツァラトゥストラは隠者の老人の家を訪ね、老人から食べ物と飲み物をもらう。そのときこの隠者は奇妙なことを言う。「お前の同伴者にも食べそして飲むように言いなさい。彼はお前より疲れている。」（「序説」8）死体にも食べ飲むように勧めることは極めて奇妙な行為である。こうした個所こそ解釈を必要とするのである。一体何を意味しているのか。死体がツァラトゥストラと同じ扱いを受けるとは、ツァラトゥストラが死体と同じ扱いを受けることである。つまり老人はツァラトゥストラを死体と同じものとして扱っているのである。

ツァラトゥストラが出会う「道化師―墓掘人―隠者」はすべて、ツァラトゥストラを死体（死んだ者）として扱っている。そのことは「道化と死体の中間」という曖昧さを破壊し、ツァラトゥストラが死体の側にいることを露にしている。ツァラトゥストラは死体なのである。このときのことをツァラトゥストラは第四部「高等な人間」において回想している。「その夕方私の仲間は綱渡り師、そして死体であった。そして私自身がほとんど一つの死体であった。」（「高等な人間」1）ツァラトゥストラ自身がほとんど死体であったことが回想されているが、このことを「道化師―墓掘人―隠者」の登場は示していたのである。しかし続けて次のように回想されている。「しかし新しい朝とともに

私に新しい真理が訪れた。……」この新しい真理とは何か。

六　新しい真理

ツァラトゥストラは綱渡り師の死体を空洞のある木のなかに置いた後、長い間眠った。そしてツァラトゥストラが起きたとき、彼は新しい真理を見た。「一つの光が私に生まれた。つまり私は同伴者を必要とする。それは生きた同伴者であって、私が行こうとするところへ私が運んでいく死んだ同伴者や死体ではない。……」（「序説」9）この新しい真理はツァラトゥストラが彼の教えに相応しい者を必要とするということを意味する。それ故ツァラトゥストラは言う。「私は牧人であるべきではないし、墓掘人であるべきではない。私は決して再び民衆と話すつもりはない。私が死んだ者に語るのもこれが最後だ。」（「序説」9）序説においてツァラトゥストラは市場の民衆に語りかけた。しかし民衆に語りかけ彼らを導くのは牧人（僧侶）である。そしてツァラトゥストラは死んだ者を同伴者としたが、それは墓掘人の仕事である。『ツァラトゥストラ』は彼の教えに相応しい同伴者を求める物語なのである。

『ツァラトゥストラ』という物語は、ツァラトゥストラが永遠回帰の教師へと成長する物語である。しかし教えはそれに相応しい者を必要とする。それ故『ツァラトゥストラ』はツァラトゥストラの成長の物語であるとともに、その教えに相応しい者を求める物語なのである。第一部最終章「贈る徳」において、ツァラトゥストラは彼の弟子たちと別れ、再び山に戻ろうとする時に次のように語る。

「お前たちはお前たちを未だ求めたことがない。それでお前たちは私を見出した。このようにすべての信者は行う。それ故にすべての信仰など大したことではない。／今や私はお前たちに、私を失いお前たちを見出せと命令する。そしてお前たちすべてが私を否認したとき初めて、私はお前たちのもとに帰って来よう。……／そしてさらにいつかお前たちは私の友となり、一つの希望の子供たちとなるべきである。そのとき私は、お前たちと共に大いなる正午

を祝うために、三回目にお前たちのもとにいたいのだ。」（「贈る徳」3）

ここでツァラトゥストラは彼の三回の下山を語っている。最初の下山は序説と第一部を舞台としている。序説でツァラトゥストラが語る相手は市場の民衆と死体（綱渡り師）であった。第一部はツァラトゥストラの信者が彼の聞き手となる。しかしツァラトゥストラは弟子たちに彼を否認することを要求する。第二の下山は彼の教えが危機に瀕していることをきっかけとしてなされ、第二部を構成する。「私の友たちを失ってしまった。私の失われた者たちを求めるべき時が来た。」（第二部最初の章「鏡を持った子供」）第四部最終章「徴」の最後はツァラトゥストラが第三の最後の下山をする場面で終わっている。それは一つの希望の子供たちと共に大いなる正午を祝うための下山である。「一つの希望の子供たち」こそがツァラトゥストラの教え、永遠回帰の教えに真に相応しい者なのである。この者は序説では次のように言われている。「共に創造する者たちをツァラトゥストラは求める、共に収穫し共に祝う者たちをツァラトゥストラは求める。」（「序説」9）三回の下山が『ツァラトゥストラ』という物語の展開を導いているが、それはツァラトゥストラの教えに相応しい者を求めることとしてである。

「私の目標に私は向かおう。私は私の道を行く。ためらう怠惰な者たちを私は飛び越える（hinwegspringen）だろう。このように私の歩みが彼らの没落であって欲しい。」（「序説」9）これが新しい真理を語るツァラトゥストラの最後の言葉である。すでに論じたように、「ためらう怠惰な者たちを私は飛び越える（hinwegspringen）」とは、道化師が綱渡り師を飛び越える（hinwegspringen）ことと同じである。ツァラトゥストラは「道化と死体の中間」という曖昧な立場を克服し、道化（道化師）になろうと決意する。生きている者としての道化師によって飛び越えられる死んだ者（死体）でなく、「ためらう怠惰な者たちを飛び越える」道化師となろうとするのである。

道化師となることは、綱渡り師を飛び越え綱から落とすことを意味する。それは「私の歩みが彼らの没落であって欲しい」と決意することである。そのために綱渡り師（ためらう怠惰な者たち）に対する同情を克服しなければなら

ない。この同情の克服こそ新しい真理の核心である。道化師は同情を克服しているが故に、悪魔のように綱渡り師を飛び越えるのである。序説はすでに同情の克服というテーマを視野に収めている。同情の克服というテーマは、永遠回帰の思想の襲来においてすでに読み取ることができる。序説においても同情の克服は明らかに語られている。序説においてツァラトゥストラは「お前たちが体験しうる最大のこと」として語っている。「それはお前たちが次のように言う時である、『私の同情に何の意味があろうか。同情は、人間たちを愛する者がそれにくぎ付けされる十字架ではないか。しかし私の同情は十字架ではない。』」（「序説」3）[22]

ツァラトゥストラが道化師となろうと決意することは、『ツァラトゥストラ』という物語にとって極めて重要である。この重要性はそれが正午においてなされたということから明らかである。「このことをツァラトゥストラが彼の心に語ったのは、太陽が正午に位置した時であった。」（「序説」10）ツァラトゥストラは「私の目標に私は向かおう」と語るが、それは正午（大いなる正午）に向かうことなのである。大いなる正午においてツァラトゥストラは永遠回帰の思想を告知するが、それは道化師としてためらう怠惰な者たちを飛び越えることである。この大いなる正午を迎えるために同情の克服が必要なのである。

「最後の教説。人間を克服するハンマーがここにある。／人間はできそこないか。いいだろう、人間がこのハンマーに耐えるかどうか我々は試そう。／これが大いなる正午である。／没落する者が自らを祝福する。／彼は無数の個人と人種の没落を予言する。／私は運命である。／私は同情を克服した。大理石の叫びにおける芸術家の歓呼の声。」[23] ハンマーは「最も重い思想」としての永遠回帰の思想である。大いなる正午において永遠回帰の告知によって「人間がこのハンマー（永遠回帰の思想）に耐えるかどうか」が試される。それによってハンマーに耐ええない無数の個人と人種が没落するだろう。彼らの没落に対する同情があれば、永遠回帰の思想を告知することはできない。それ故永遠回帰の告知のために「私は同情を克服した」と言いうるのでなければならない。「大理石の叫び」とは、芸

術家（永遠回帰の告知者）がハンマー（永遠回帰の思想）[24]によって大理石を打ち砕くことによる大理石の叫び（それに耐ええない無数の個人と人種の没落に際しての彼らの叫び声、古き世の没落）である。[25]永遠回帰の告知者は彼らへの同情を克服し、むしろ芸術家（創造者）として古き世の没落を意志し、新しき世を創造することに歓呼の声をあげるのである。「ためらう怠惰な者たちを私は飛び越える（hinwegspringen）だろう。このように私の歩みが彼らの没落であって欲しい」（「序説」9）と語るツァラトゥストラは、同情を克服した道化師となって大いなる正午を迎えることを欲しているのである。

『ツァラトゥストラ』はツァラトゥストラが同情を克服する道化師となる物語である。そうであるとすれば、『ツァラトゥストラ』は単なる悲劇ではありえないだろう。

七　incipit parodia

本論文の主題は序説における最も印象的な出来事、つまり道化師が綱渡り師を飛び越えることの意味を明らかにすることであった。そして道化師をツァラトゥストラの敵対者とする従来の解釈を批判することから本稿の考察は開始された。道化師をこのように否定的に解釈する理由として、「人間はまた飛び越えられうる」とする道化師の思想（「新旧の板」4）、そして悪魔としての道化師が考えられる。この二つの理由についてはすでに批判的に検討した。しかしツァラトゥストラを道化師と見なさないことの背景に、より深い理由がある。それは悲劇としての『ツァラトゥストラ』という根深い先入観である。悲劇の主人公は英雄であり、道化師を主人公とすることなどありえないだろう。

しかし序説においてツァラトゥストラが道化師となる決意をすることは否定できない。遺稿ははっきり言う。「ツァラトゥストラ自身が、哀れな綱渡り師を飛び越える道化師である。」道化師ツァラトゥストラは英雄ツァラトゥス

トラではない。道化師となる物語が単なる悲劇である訳がない。『ツァラトゥストラ』を悲劇とする先入観から解放され、新たな目で『ツァラトゥストラ』を読み返す作業が必要なのである。道化師ツァラトゥストラはこの読み直しを要求する。

「最高の山に登る者は、すべての悲‐劇と悲劇的‐真剣さを笑う」（「読むことと書くこと」）と語るツァラトゥストラ自身が、悲劇を超えた高みを見据えていることは明らかである。そして悲劇の主人公とされる英雄は『ツァラトゥストラ』において最高の位置を占めているのでなく、単に超えられるべき段階なのである。第二部「崇高な者」の最後にツァラトゥストラは語る。「魂を英雄が去るとき初めて、夢の中で魂に近づくのだ、超‐英雄が。」この悲劇を超えた高みは『ツァラトゥストラ』そのものを貫いている。一八八三年二月に『ツァラトゥストラ』第一部が完成するが、その前年の十二月始めの手紙でニーチェは書いていた。「そこから見れば悲劇的な問題が私の下にあるような高みを私は欲するのです。」[26]

確かに『喜ばしき知』においてニーチェは「悲劇が始まる」として『ツァラトゥストラ』の冒頭部分を書いている。しかしこのときすでにニーチェは悲劇を越えた高みを知っていた。「悲劇を道徳的に味わう者はさらにいくつかの段階を登らねばならない。」[27]「悲劇を道徳的に味わう」ことに対して、「そこから見れば悲劇的な問題が私の下にあるような高み」が対置されるだろう。「悲劇を道徳的に味わう」という言葉はアリストテレス的な悲劇理解を想定していると考えられる。それは悲劇を「恐怖と同情という悲劇の効果」（『詩学』第14節）から理解する。「道徳的」という言葉のうちに同情を読み取ることができる。同情の克服こそが悲劇を笑う高みを可能とし、恐怖と同情を喚起する悲劇を克服するのである。

そしてその高みに立つのは、単なる英雄でなく、快活な英雄である。ツァラトゥストラ自身もまた運命の悲劇のまっただ中にいることは否定できない。しかしツァラトゥストラは悲劇を超えた次元に立っている。つまりツァラトゥ

ストラは単なる英雄でなく、快活な英雄である。快活な英雄はしかし悲劇を笑うことにおいて、残酷であり、悪意に満ちている。「悲劇が始まる」[10]と語ったとき、ニーチェはすでに「悲劇を笑う」という視点を持っていた。その意味をも含んだうえで、「悲劇が始まる」という言葉を理解すべきである。その含意を改めて、「パロディが始まる」という仕方で露わにしたのである。「『悲劇が始まる』(Incipit tragoedia)—この危険であり—危険でない書物の終りにこのように書いてある。つまり用心して欲しいのだ。とびきり悪く悪意ある何ものかの到来が予告されている。つまりパロディが始まる(incipit parodia)、それは疑いがない……。」

新しい真理の核心はツァラトゥストラが道化師になろうと決意するすることにある。その決意をしたのは正午であり、その時ツァラトゥストラは頭上に彼の動物である鷲と蛇を見る。そして「私の動物たちが私を導いてくれるように」(「序説」10)とツァラトゥストラは願うのである。道化師となる歩みが『ツァラトゥストラ』の物語を形成している。その歩みを導くのはツァラトゥストラの動物たちである。ツァラトゥストラの動物たちに即してツァラトゥストラの歩みを捉えなければならない。それが我々の次の課題となるだろう。

註

(1) K. Jaspers, "Nietzsche", Walter de Gruyter, 1936, S.360.

(2) G. Deleuze, "Nietzsche et la philosophie", p.219.

(3) ibid., p.219.

(4) ibid., p.220.

(5) 白水社『ツァラトゥストラ』四九一頁。

ちくま学芸文庫『ツァラトゥストラ』の訳註も全く同じ理解を示している。道化師は「民衆をそそのかすラディカルな煽動者、

目標が一挙にして（とくに暴力によって）達成されうると民衆に対してまことしやかに説くところの、狡猾だが良心なきデマゴーグ」（上、三〇五頁）である。それに対して綱渡り師は「超人への意志を表示する象徴」（上、二八九頁）、「ツァラトゥストラ―ニーチェ自身の思想の象徴として、『超人への意志』を表示するもの」（上、三〇七頁）とされている。世界の名著『ニーチェ』の訳註も同じである。「「飛び越え」は、性急であり暴力的である。「ツァラトゥストラの序説」6の道化師参照。」（世界の名著『ニーチェ』二九五頁）

あるいは道化師は「空疎な誇張と多弁と嘲笑をこととするが、本性不明の、むしろ本性を欠く者。のちに出る魔術師、俳優よりさらに無意味な存在」（世界文学大系（筑摩書房）『ニーチェ』十一頁）とされる。『ニーチェ事典』においても、「自らの卑小な存在に居直り超人を拒否する道化」と「跳躍を望みつつもそれに耐えられずに自らの生命を滅ぼす綱渡り師」という仕方で対比されている。（『ニーチェ事典』四〇四頁）

（6）Gustav Naumann, "Zarathustra-Commentar" I, S.107f.

（7）VIII1, S.557 Herbst 1883 16 [88]

（8）「最初に一人の者が来なければならない、／―お前たちを再び笑わせる一人の者、一人の善き快活な道化（Hanswurst）、一人の踊る者・風・風よけ、或る老いた道化が。」（第四部「挨拶」）来なければならないとされる「或る老いた道化（irgend ein alter Narr）」がツァラトゥストラであることは、この箇所に対応する草稿から明らかである。「お前たちを笑わせる一人の者が恐らく来なければならない―／―一人の善き快活な道化（Hanswurst）、頭と足を持った踊る者、一つの風・風よけ、或る道化・ツァラトゥストラ（irgend ein Narr und Zarathustra）が。」（VII4, S.674）

（9）VIII1, S.627 Herbst 1883 20-10

（10）VIII1, S.557 Herbst 1883 16-88

（11）VIII1, S.548 Herbst 1883 16-65

（12）「市場はもったいぶった道化師たち（feierliche Possenreißer）に満ちている。―そして群衆はその大物たちを自慢している。つまり彼らは群衆にとってその時代の支配者である。」（第一部「市場のハエ」）ツァラトゥストラは「もったいぶった道化師たち」を市場のハエとして批判している。この「もったいぶった道化師たち」は、序説での道化師、「新旧の板」での道化師を同一視することはできない。『ツァラトゥストラ』における「道化師」の用例で、この箇所だけに形容詞「もったいぶった」が付いており、し

かも複数形である。このことは「市場のハエ」での道化師が他の用例と異なることを示しているだろう。ナウマン、ヤスパース、ドゥルーズも「市場のハエ」に言及していないのは、正しいのである。

(13) VII2, S.281 Sommer-Herbst 1884 27-23

(14) VII1, S.583 Herbst 1883 17-56

(15) VIII1, S.123 Herbst 1885-Herbst1886 2-127 (WzM, S.7)

(16) 草稿では次のようになっていた。「人間の存在は不気味であり、未だ意味を欠いている。つまり道化(ein Hanswurst)が人間の存在にとって破滅のもとになりうる。／この者は何のために生きるのか。あの者は何のために死ぬのか。誰もそのことを知りえない。何故なら何のためにがそこに存在しないからである。」(VI4, S.20)

(17) VII1, S.638 Herbst 1883 21-6

(18) VII1, S.627, Herbst 1883 20-10

(19) VI4, S.11.

(20) 「ツァラトゥストラの結論は、思想を感じないために、人間が動物へと退化しなければならないということである。それとも超人へと自己形成しなければならない。」(VII1, S.503f., Sommer-Herbst 1883 15-4)

(21) 遺稿において綱渡り師は次のように言う。「私は踊ることを教えられた一匹の動物以上のものではない。つまり私は同情に値しない。」(VI4, S.28)

(22) 「同情が神を窒息させたと、人が語っていることは本当なのか。／神は人間が十字架にかかるのを見て、それに耐えられなかったと、そして人間に対する愛が神の地獄となり最後に神の死となったと、人が語っていることは本当なのか。」(第四部「失職」)
「同情はそれが強ければ、地獄の感情である。／人間への最高の愛からの殺害。」(VIII1, S.153, November 1882-Februar 1883 4-128)
「同情は地獄の感情である。つまり同情はそれ自身、人間を愛する者が架けられる十字架である。」(VIII1, S.210, November 1882-Februar 1883 5-1-168)

(23) VII2, S.73 Fruehjahr 1884 25-249
「人間の克服という目的のための人間の支配。／その教説を耐える者たちを除いて、人間がそれにおいて没落する教説による克服。」(VIII1, S.538Herbst 1883 16-41)

(24) 「ハンマーとしての最も重い認識」(VIII1, S.540 Herbst 1883 16-48)「ハンマーとしての最も重い思想」(VII2, S.228 Sommer-Herbst 1884 26-298)「最も重い認識」「最も重い思想」は、永遠回帰の思想を意味する。

(25) 「超人は従来の徳を完全に超えており、同情から離れ去って非情である。容赦なく彼の大理石を打ち砕く創造者。／ツァラトゥストラの最後の教説のために。」(VIII1, S.386 Juni-Juli 1883 10-25)

(26) Nietzsche Briefwechsel III-1, S.288 (An Heinrich von Stein, Anfang Dezember 1882) 一八八二年十二月初めの手紙でこのように書いたニーチェは、翌年一八八三年二月に『ツァラトゥストラ』第一部を一気に書き、五月に出版した。vgl. VI4, S.951ff.

(27) V2, S.492 Herbst 1881 12-102